

「MLA連携」の枠組みを探る: 日本と海外の動向と文献を手がかりに

2010年度明治大学図書館情報学研究会
シンポジウム「MLA連携の意義と課題」
(2010年10月23日 明治大学駿河台キャンパス)

京都大学附属図書館研究開発室 古賀 崇
tkoga@kulib.kyoto-u.ac.jp
http://researchmap.jp/T_Koga_Govinfo/

1

本日の内容

- 自己紹介(私にとってのMLA連携)
- 今なぜMLA連携なのか
- 「デジタル化」を中心とした連携の枠組み
- 「図書館情報学事典」にみる連携の枠組み
- 今後の課題・方向性

2

0. 自己紹介 (私にとってのMLA連携)

3

経歴など

- 福岡県柳川市出身
- 東京大学法学部卒業後、東京大学大学院教育学研究科修士・博士課程、米国シラキュース大学情報学大学院修士課程にて図書館情報学を学ぶ
- 2004年4月～2008年12月 国立情報学研究所(NII)助手・助教
- 2009年1月～ 京都大学附属図書館研究開発室准教授
 - NII客員准教授、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻非常勤講師などを兼任

4

なぜMLA連携を考えるようになったか

- 「政府情報アクセス」をめぐる研究
 - 「出版」される刊行物、ウェブサイト
 - 「当座の出版」を前提としない公文書
- ※日本の「公文書管理法」: 2009年7月公布、2011年4月施行予定
- 米国留学中、「文書館の中の図書室」でインターン
 - 「米国国立公文書館・記録管理庁(NARA)」の中の「図書館・情報センター」
 - NARAで展示される、博物館資料に近い歴史的文書(例: 独立宣言、合衆国憲法)

5

NARAワシントン本館にて (2009年9月)



資料展示室(ロタンダ)



合衆国憲法

6

1. 今なぜMLA連携なのか

7

さまざまな要因

- 「デジタル資料」
 - デジタルへの変換 + ボーン・デジタル
 - 資料の多様化
 - 刊行物でも文書でもない「データ」など
- ※参照(大阪大学附属図書館での講演、2010年9月):
http://www.library.osaka-u.ac.jp/seminar/janul_kinki.htm
- 地域史+家系学
- 文化遺産・知的資源・学習資源
- 資料保存・情報保存

8

日本での論集(1)

- 水谷長志編『MLA連携の現状・課題・将来』勉誠出版, 2010.

– アート・ドキュメンテーション学会創立20周年記念「第4回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム」(2009年12月)の記録



9

日本での論集(2)

- 日本図書館情報学会研究委員会編『図書館・博物館・文書館の連携』(図書館情報学のフロンティアNo. 10) 勉誠出版, 2010

– 第58回日本図書館情報学会研究大会シンポジウムを10月10日に開催済



10

M・L・Aの性格づけ

※田窪直規「博物館・図書館・文書館の連携、いわゆるMLA連携について」(「フロンティア」巻頭総論)より

- 利用vs保存
 - 専門職の研究者性
 - メディアとしての資料の違い: メッセージとキャリア(モノ)の観点から
 - 図書館(L)資料: メッセージ志向
 - 博物館(M)資料: キャリヤー志向
 - アーカイブズ(A)資料: 上2つの中間
- 「LAM」「MAL」という並びのほうが適切では？

11

「枠組み」として考えておきたいこと

- 「デジタル化」こそが、MLA連携の核なのか？
- あるいは、それ以外に何が「枠組み」として考えられるか？
 - 図書館／図書館情報学からの「広がり」として...

12

2. 「デジタル化」を中心とした 連携の枠組み

13

A Framework of Guidance for Building Good Digital Collections

- 最新版は第3版(2007): <http://framework.niso.org/>
- 米国情報標準化機構(National Information Standard Organization: NISO)傘下の委員会が編集
- M・L・Aにわたる「デジタルコレクション」の構築・管理に関する「ベスト・プラクティス」集



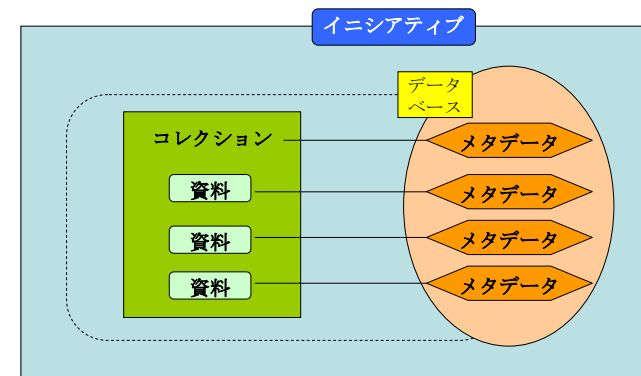
14

2007年版の内容:4つの大枠の中で

- コレクション
 - コレクション構築指針、アクセス保障、知的財産権への配慮 など
- オブジェクト(資料)
 - 保存と将来の利用に堪えるフォーマットの選択、安定した識別子(identifier)の利用 など
- メタデータ
 - 相互運用性(記述標準)、典拠コントロール、利用条件の記述 など
- イニシアティブ
 - 人材配置、評価、コレクション運用の持続性(ライフサイクル)の意識 など

15

古賀による図示



© Copyright 2010 Takashi Koga. All rights reserved.

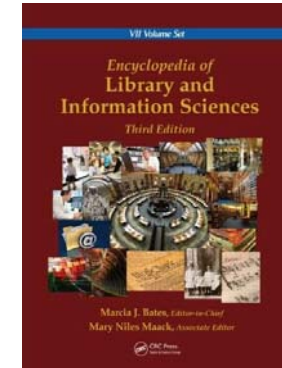
16

3. 「図書館情報学事典」にみる 連携の枠組み

17

考察対象

- Encyclopedia of Library and Information Sciences. 3rd ed. Marcia J. Bates, Mary Niles Maack, eds. CRC Press, 2010. 7 vols.
 - 明大図書館(駿河台)に所蔵あり



18

この事典の系譜

- Encyclopedia of Library and Information Science. vol. 1-73, M. Dekker, 1968-2003.
- Encyclopedia of Library and Information Science. 2nd ed., vol. 1-4, M. Dekker, 2003.
 - いずれも博物館、文書館に関する内容を盛り込んでいた

19

事典(第3版)のまえがきより

- 情報と「文化的記録(cultural record)」に関連する学問領域の融合を意識
 - 具体的には: 図書館情報学、アーカイブズ学、博物館学など
 - 「記録される情報」のデジタル化による影響: 現実的課題への対処
 - 理論・研究面でも、各領域が「互いに学び合う」ことができる状況に

20

Topical Table of Contents ＝各項目を整理する枠組み

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| 1. 情報関連の領域と専門職 | 7. 専門的サービスと活動 |
| 2. コンセプト、理論、アイデア | 8. 「文化的記録」の利用者 |
| 3. 研究領域 | 9. 団体 |
| 4. 機関 | 10. 国ごとの文化的機関・文化的情報源 |
| 5. システムとネットワーク | 11. 歴史 |
| 6. (専門的)資料、ジャンル、ドキュメント(標準・規則類) | |

21

事典編者による解説

- Bates, Marcia J. Defining the information disciplines in encyclopedia development. Information Research. 12(4), 2007.
<http://informationr.net/ir/12-4/colis/colis29.html>
- Bates, Marcia J. An operational definition of the information disciplines. iConference 2010. University of Illinois Graduate School of Library and Information Science, Feb. 3-6, 2010.
<http://hdl.handle.net/2142/14922>

22

4. 今後の課題・方向性

23

どのレベルでの「連携」か？

- 間接サービスの面
 - － 資料の受け入れ・管理・保存
 - － 資料の組織化
 - － 資料の検索、データベース構築
- 直接サービスの面
 - － 展示活動
 - － レファレンスほか(人的・直接)サービス提供
 - － 利用(者)教育
- マネジメントの面
 - － 組織マネジメント(連携 or 融合)
 - － 担当職員
 - － トップレベルの方針・政策

24

何より必要なのは...

M・L・Aにおける
人のつながり・交流!

25

ありがとうございました

- 本講演は、以下の助成による成果の一部です。
 - 平成21・22年度文部科学省科学研究費補助金 若手研究(B)「図書館・文書館等における政府情報の保存・アクセスをめぐる比較制度的研究」(課題番号:21700272、研究代表者:古賀 崇)

26